

戦中期

昭和12(1937)年頃～昭和20(1945)年頃

戦火に包まれた神奈川

当時の神奈川は、相模原や横須賀などに旧日本軍の基地や工場などを数多く抱え、軍事的な要衝としての機能も担っていました。

昭和6(1931)年の満州事変を契機に、戦時体制が徐々に強化されていき、昭和12(1937)年には日中戦争が、昭和16(1941)年には太平洋戦争が開戦すると、国家総動員体制に突入しました。

戦況が悪化してくると、アメリカ軍による本土空襲の脅威がせまり、都市部で学童の集団疎開が開始されました。

そして、昭和20(1945)年にはアメリカ軍の空襲が本格化し、激しい爆撃が神奈川を襲いました。多くの人が犠牲になり、市街地は壊滅的な被害を受け、神奈川は疲弊していきます。

終戦 占領・接收の時代へ

昭和20(1945)年8月15日に日本はポツダム宣言を受諾し、長きにわたった戦争の幕が下されました。関東大震災からの復興を遂げていた神奈川県は、再び荒野からの出発を余儀なくされました。

終戦直後の神奈川県には、連合国軍が進駐し、重要占領地域として位置付けられました。戦前日本の体制から脱却するための民主的改革と戦災復興が進められる一方で、横浜、相模原、横須賀など多くの地域では、広大な土地とともに旧日本軍の施設や民間施設が接收され、自由に使うことは制限されました。これにより、神奈川県の復興が本格的に進められるようになるまでに、多大な年月を要することになるのです。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

戦争到来と空襲



県庁周辺の様子（昭和21年11月1日）昭和館提供

空襲の被害による空き地が目立つ一方で、現在にも面影を残す建物が残っています。

慣れ親しんだ人やまちが失われていく

昭和12（1937）年7月には日中戦争が、昭和16（1941）年には太平洋戦争が始まりました。戦況が悪化してくると、アメリカ軍による日本本土への空襲が相次ぐようになりました。

県内では、軍事施設があった横浜、川崎、横須賀だけでなく、軍事施設がなかった小田原、二宮、山北などでも、爆撃や戦闘機の機銃掃射による空襲を受けました。焼夷弾から発生する火災もあいまって、神奈川の多くの地域で甚大な被害が発生しました。



昭和館提供

空襲を受けた平塚の市街地（昭和20年9月9日）

旧国道1号線と不動通りの交差点付近。

中央奥に見える煙突は横須賀海軍工廠平塚分工場。



川崎市平和館所蔵

六郷橋付近からみた川崎市街（昭和20年）

中央は第一京浜国道。左側は現在の川崎競馬場の辺り。

川崎は度々空襲を受けましたが、昭和20年4月15日の大空襲では全市の30%が壊滅しました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

戦時下の学童集団疎開

ある疎開先の1日の計画表

20時00分	18時00分	17時30分	16時00分	13時00分	12時00分	11時30分	8時30分	7時30分	6時30分
就寝	整理反省自習	夕食	入浴	登校授業	昼食	体操	自習、作業または寮舎授業	礼拝―宮城遥拝御歌奉謡	起床―乾布摩擦健康調査清掃

いつ終わるのか
分からない生活が続く

昭和19（1944）年には、戦局が悪化していきます。アメリカ軍の本土空襲が本格化すると考えた国は、子どもたちを守るために学童疎開を実施することを決定しました。

神奈川県内で集団疎開の対象となったのは、横浜、川崎、横須賀の国民学校3～6年生のうち、縁故疎開※ができない約4万人の子どもたちでした。

※ 地方の親戚や知人を頼った疎開

当初予定された疎開先は静岡県でしたが、近藤知事は子どもたちの負担を考え、県内（主に県央・県西地域）で受け入れることを決定しました。

疎開先での子どもたちは、教員の授業を受けたり、地元農家の作業を手伝うなどして過ごしました。

集団疎開に同行したある教員が津久井郡串川村（現・相模原市緑区）で活動した日々を振り返るには、子どもたちの食べ物は配給の事情で数か月同じものが続き、風呂は月一回、近隣住民の風呂を借りていましたが、のちにシラミが湧いたせいで露天風呂に交代で入ることになったとのことです。

こうした栄養不足や不衛生が原因で腫れ物ができる生徒が多く、配給のわずかな薬をわけて塗ってしのいでいたようでした。

終戦後も、横浜、川崎、横須賀の学校施設は空襲で焼失したり、米軍に接收されて使えないことがあり、なかなか帰れない子どもたちが大勢いました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

進駐軍の玄関口になった神奈川県



オーストラリア戦争記念館所蔵・昭和館提供



昭和館提供

▲ 厚木飛行場で挨拶を受けるマッカーサー（昭和20年8月30日）

マッカーサーの右隣は、アメリカ第8軍司令部（GHQが東京都に移転した後も神奈川県に残り続け、日本中の進駐軍を統括した）司令官アイケルバーガー中将

◀ 厚木飛行場に降り立つマッカーサー（昭和20年8月30日）

当時の厚木飛行場付近は日本軍の徹底抗戦の動きがあったばかり。日本軍の撤退が進められる一方で、飛行場の警備にあたる警察官が不足していた神奈川県は、国に働きかけて近隣府県から応援をかき集めました。（神奈川県：約3,000名、近隣府県：約2,000名）

終戦してまもなく 突然の難題に直面



ホテルニューグランド（昭和20年9月1日）昭和館提供
接收され、マッカーサーら進駐軍首脳の宿舎となりました。

8月15日に終戦を迎えた直後である8月21日の深夜、国から県に一本の電話が入ります。「連合国軍が8月26日から最初の進駐先として神奈川県に来るので、受入・警備の準備をしてほしい」というものでした。

戦時体制と空襲によって物資が不足し、荒廃した環境の中で、県は国などと協力しつつ、連合国軍のために、設備が整った住居、倉庫用の敷地や200台以上の自動車等を用意しなければならませんでした。

8月30日の昼、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサーが厚木飛行場に到着。夕方には横浜に進駐してきました。9月初旬には、県内に5万人をこえる進駐軍が駐屯しました。



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ

接收下での神奈川県の戦後



横浜市中区にあったオクタゴンシアター（昭和20年10月16日）昭和館提供

接收前は横浜松竹映画劇場でした（現存せず）。接收後はアメリカ第8軍司令部が置られました。

1階中央に見える第8軍の8角形の記章（オクタゴン）が改名された名前の由来です。

占領統治を進める進駐軍は、横浜や横須賀を中心に空襲の被害を免れていた建物や港湾設備などを次々と接收していきました。

県は、食糧確保や戦災者の援護、簡易住宅の建設など県民の生活に直結する課題に取り組んでいるところでした。加えて、進駐軍のために接收施設で働く労働者の手配・管理や経費の肩代わりなどを任されることとなり、県政にとって大きな負担となりました。

昭和26（1951）年にサンフランシスコ平和条約が調印されたことを契機に、内山知事は県内自治体と協力して、全面的な接收解除を政府に要請する運動を推進しました。

その結果、大さん橋など一部の接收地は返還されましたが、その範囲はごく僅かで、接收地の返還は現代まで続く課題となりました。



横須賀海軍基地で解体を待つ日本海軍機群（昭和20年9月6日）昭和館提供



横浜市中区本牧町に建てられた米軍住宅（昭和23年11月15日）昭和館提供



かながわ「昭和100年」

つながる心、ともに未来へ